

Title	神話學概論(西村眞次著, 早稻田大學出版部發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.1 (1928. 3) ,p.141- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280300-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書

評

古風土記逸文（栗田寛著大岡山書店發行）

人間の生活が土地の上に於いて營まれる以上、その土地の研究が人間の生活を理解する上に於いて、重要であることはいふまでもない。即ち人間の生活を主として動的にみたる歴史的理諭と、靜的にみたる地理的理諭と兩者相俟つて、人間の生活の全體を知ることができるるのである。それ故歴史研究に際しても、地誌類が極めて貴重なる資料となるのであつて、奈良時代に始めてつくられ、僅かながらも今日まで傳へられたる古風土記が、記紀や萬葉集や祝詞のごときものとともに、文献の至つて少き古代史の研究に對して、缺くべからざる資料となつてゐる。けれども現存する古風土記は、僅か數ヶ國のものにすぎず、他はすべて散佚してしまつた。しかしながら種々の古書に援引されたるその逸文を蒐録しようとする努力は、すでに徳川時代から多くの人々によつて試みられたが、終に故栗田博士によつて大成され、明治三十一年本書の初版が發行された。爾來同書が學者の間に珍重せられ、學界を益すること頗る大であつたが、惜しい哉久しく絶版となり、今日に於いては市價甚だ高く、しかもなほ手に入れがたき有様となり、學界の大なる憾みとなつてゐた。かくるときに際して、新装をこらしたる本書の再刊をみたことは、學界多年の渴望を齎する

快事として、誠に慶賀にたへない。新版は宮地直一氏によつて、新に逸文補遺三條が加へられ、更に舊版に於ける本文の傍訓を假名交りの讀下し文となし、また引用書目解題と索引とを卷末に附せられたことは、ます／＼本書の價値を大ならしむるものである。要する本書はわが古代史研究に對しては勿論のこと、神話や土俗の研究に對し、或は近時殊にさかんとなれる郷土誌研究に對して甚大なる寄與をなすであらう。なほ本書の姉妹書たる逸文考證及標註古風土記もまた、本書のごとく新装をこらして再刊されんことを望んでやまない。（松本芳夫）

神話學概論（西村早稻田大學出版部發行）

すでに文化人類學や體質人類學、並びに文化移動論等の著書によつて、わが人類學界を賑はしたる西村教授が、今までこゝに神話學概論を公にした。たゞ新しき方面に開拓の先鞭をつけられようとする教授の努力は誠に敬服の外なく、たとひその見解にまゝ議論の餘地があらうとも、興味を喚起せしめ、問題を提出するところの功績は大なりといはねばならない。殊に神話學のごときは古代民族及び自然民族の精神生活を知る上に於いて、最も貴重なる資料であるにもかゝはらず、從來わが國に於いては神話學に関する論著は極めて少く、その知識の缺乏が、古代史研究の上に多くの支障と誤謬とをもたらすことがあつた。從つてこの方面的開拓が最ものぞましきものであつた關係上、本書の出現は、わが讀書界の要求をみたすものとして、江湖の歓迎をうけるであらう。

とを信ずる。

本書の内容を簡単に紹介すれば、第一章緒論に於いては神話學の意義から説きおこし、それと民俗學、土俗學との關係を論じて、神話學が文化人類學の一分科たる土俗學の一分枝であつて、宗教學や民俗學と姉妹關係にあることを説き、更に古代から現代にいたるまでの神話學の發展を叙し、その中に於いても殊に、教授自身が支持せらるゝ文化移動論を主張すると、この所謂マンチニスター學派の説をつよく紹介された。第二章本論に於いては神話の起源、その成長、その特質を論じ、第三章方法論に於いては材料の蒐集法と神話の分類法とを論じた後、比較研究法に論及して、統計的及び人類學的二研究法を特に詳説され、第四章はかくの二とき研究法の應用によつてなれる白鳥處女説話の研究であり、第五章は鰐魚説話の研究であつて、この兩篇は著者自らその創意と苦心とを認めらるゝところの力作である。第六章は結論として本書全體の論述の總收をなし、最後に神話學的新職分を論じてゐる。とにかく本書は、『文化人類學的方法を以て世界の神話傳説を研究し、それを古代史闡明の證徵に役立てようとしてゐる』最近の神話學界の傾向の立場に立ち、泰西の諸學説を綜合してなれるものであつて、神話學を研究せんとするものの是非一讀すべからむのである。(松本芳夫)

古賀家本西遊錄

となつたが、長春真人の西遊記とか、耶律楚材の西遊錄とかいふやうな書名は忘れ得ぬ。巴里ギュートネル書店から來た最近の目録(九十一編)を見ると、

Si yeou lou (*voyage dans l'Ouest*) de Ye-lu Tch'outsai, ministre de Gengis Khan. Texte complète, publié pour la première fois par M. Kanla Kichiro, 1927

となる。M. Kanla Kichiro は文學士神田喜一郎氏の「」^{ノム}兼て相識の間柄であるため、書を飛ばして同書懸望の意を告げた所、幸に一本の惠贈を得た。神田氏が宮内省圖書寮所蔵の漢籍取調中古賀家の献本中に本書を發見せられ、而もそれが老學叢談に收められた西遊錄とは大いに相異してゐるので、段々調査せられると、古賀家本の原本は東福寺普門院の藏本で、普門院の藏本は大抵同院の開祖聖一國師が將來したものである。聖一國師が入宋したは四條天皇の嘉慶二年で、蒙古の太宗七年に當り、國師と耶律楚材とは時を同じくしてゐる。然も文和二年に編纂した普門院の藏書目録の中に、西遊錄が見えて居るから、普門院本の西遊錄は確に聖一國師が齋し歸つたもので、完本であることはいふまでもないといふことになり、遂に自費を以て本書を印刷せられた次第である。喜一郎氏の祖父に當られる香嚴第には自分は在阪の節入浴して一再ならず拜晤したことがある、喜一郎氏の書物好きは確に香嚴翁の遺鉢を傳へられたのであらう。(幸田成友)